

跨越文化：

中日跨文化交际

文化を超えて——中日の異文化間  
コミュニケーション

主编  
平 岑  
筱 李  
范



科学出版社

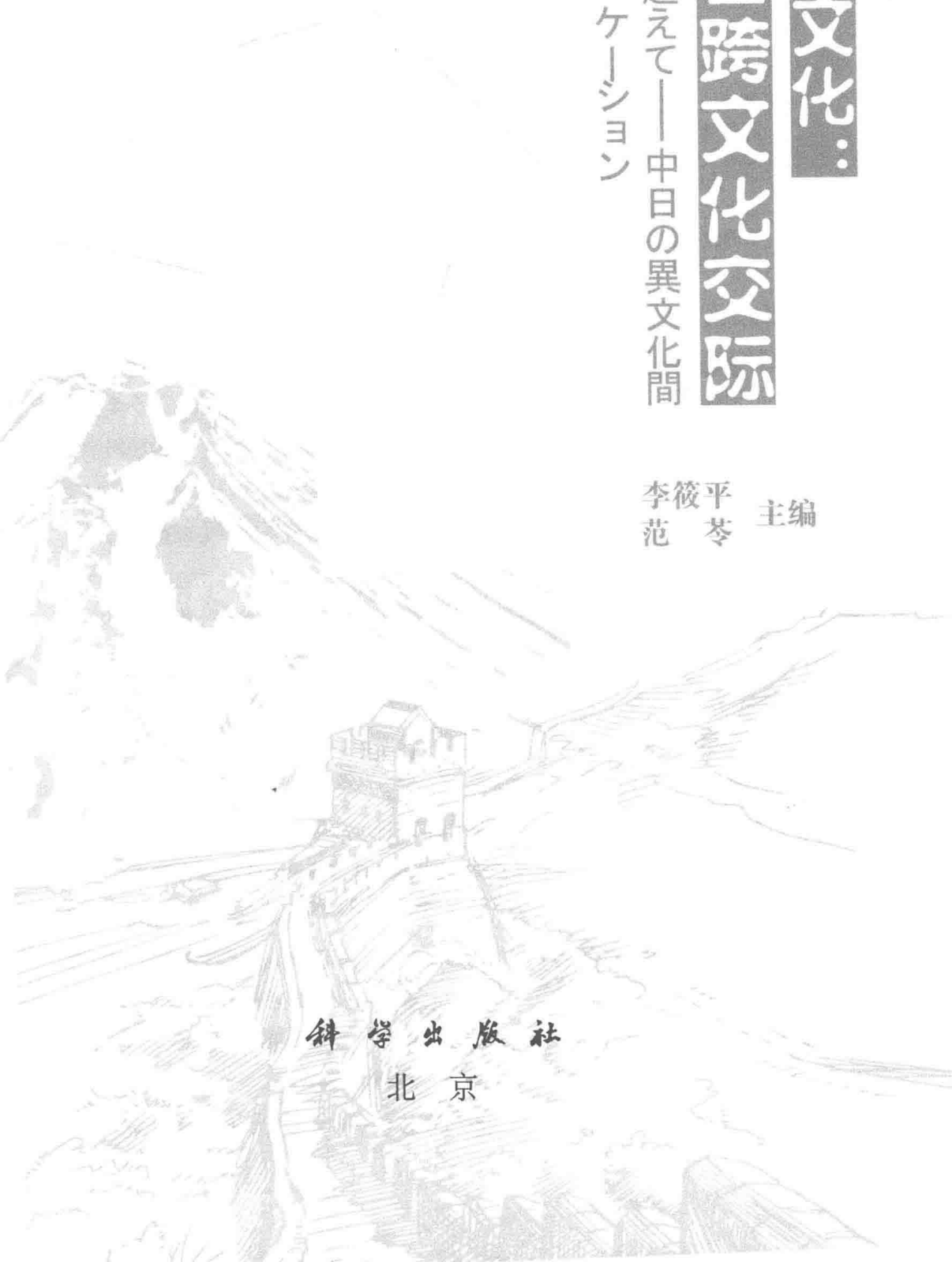
跨越文化：

中日跨文化交际

文化を超えて——中日の異文化間  
コミュニケーション

李筱平 主编  
范苓

科学出版社  
北京



## 内 容 简 介

本书吸收了国内外跨文化交际的最新研究成果,结合我国日语学习者的特点及实际需求,在对跨文化交际的基本理论及基本概念进行梳理的基础上,重点阐述日本文化的特点、日本人的交际习惯及交际心理、分析文化背景对于交际过程的影响。

本书着眼于对文化差异的梳理,通过中日跨文化交际的实际案例,从日本文化因素、思维方式、社会交往、人际关系、语言及非语言行为习惯的差异、价值观等不同角度,分析日本人的交际特点及中日文化的差异,以提高日语学习者的跨文化意识及交际能力,克服跨文化交际障碍。

### 图书在版编目(CIP)数据

跨越文化:中日跨文化交际(文化を超えて—中日の異文化間コミュニケーション) / 李筱平, 范苓主编. —北京: 科学出版社, 2015

ISBN 978-7-03-045402-7

I. 跨… II. ①李…②范… III. 比较文化—文化研究—中国、日本—日文 IV. G04

中国版本图书馆CIP数据核字(2015)第193579号

责任编辑: 徐莹 杨凯 / 责任制作: 魏 谨

责任印制: 徐晓晨 / 封面设计: 刘素霞

北京东方科龙图文有限公司 制作

<http://www.okbook.com.cn>

科学出版社 出版

北京东黄城根北街16号

邮政编码: 100717

<http://www.sciencep.com>

北京京华虎彩印刷有限公司 印刷

科学出版社发行 各地新华书店经销

\*

2015年7月第 一 版 开本: 720×1000 1/16

2015年7月第一次印刷 印张: 12 1/2

字数: 200 000

定价: 50.00元

(如有印装质量问题, 我社负责调换)

# はしがき

グローバル化の進化に伴って中日両国における経済面、文化面、社会面などの交流機会が増えつつ、コミュニケーション能力を持つ日本語の人材が強く求められるようになった。

中国国内において、日本語専攻を開設した大学が急増し、日本語学習者が増えている。残念なことに、大学で行われている日本語教育がともすれば、日本語以外に、表層的な日本事情、日本概況、日本文化などで足踏みしているように思われる。

国際化の時代の要請に、日本語教育も、異文化の相互理解、異文化コミュニケーション能力を育成することは必要になってくる。それを受けて、近年、異文化コミュニケーションの科目を設置する大学も増えている。使われた教科書は、日本人の書いた日本人向けの異文化コミュニケーションの本を選ぶのが多く、これは中国人日本語学習者にとって対応性や整合性に欠け、学習者の異文化コミュニケーション能力の養成、日本人の価値観・行動様式への把握や理解力の向上には不都合なものが多いといわざるを得ない。それゆえ、日本語専攻の卒業生はいったん日本人と付き合いようになると、相手の話を正しく理解し、語意を間違いなく把握することができず、語意理解面での偏差と言語応用面での偏差が生じ、文化摩擦、価値観の衝突、誤解ひいてはトラブルまで生じ、言語そのものでは異文化間の問題を解決することはできないということは改めて認識されるようになっていく。

最近、異文化コミュニケーションの諸問題に接したり関心を抱くようになって

たりした学生や一般社会人から、偏見を持たず、先入観を入れず、文化の良し悪しを安易に評価せず、日本文化の特徴や特殊性などを客観的に分りやすく、やや専門的な「異文化コミュニケーション教材」刊行の要望が多く聞かれるようになってきている。このようなご期待に応えるために本書を作ったのである。

本書は、日本語学習者の異文化相互理解に対する積極的態度、異文化の接触における適応力およびその行動における異文化コミュニケーション能力の育成を目的とするものである。日本文化の解釈や分析が異文化コミュニケーション理論の過程を貫き、中日言語・文化の特徴を絞って比較分析を行い、これを通して中日異文化コミュニケーションの重要性を強調し、中国人日本語学習者が、効率的に日本人とコミュニケーションを行う際に役立つものに焦点を置いている。

中国の大学における日本語専攻の高学年生や大学院生を対象に必修科目と選択科目の教材として作成したものである。読者は主に中級およびそれ以上のレベルに達した学生や一般社会人の日本語学習者だと考えている。日本文化の特徴、文化の差などを理解することを通じて日本文化への理解力を高め、文化衝突を避け、問題解決の能力を向上させることができれば幸いに思われる。

本書は、国内外の異文化コミュニケーション学領域の最新研究成果を吸収し、中日文化の特徴をまとめながら、学習者の特徴やニーズにあわせて書いたものである。学術性、実用性およびオリジナリティーをもち、中日異文化コミュニケーションの研究や日本語学習者の異文化コミュニケーション能力の養成には役に立つことを狙いとするのである。

## 執筆にあたって

本書の執筆者は3つのグループによって構成されている。第1は中日言語文化の研究者である大連理工大学教授の李筱平先生と遼寧師範大学教授の范苓先生である。二人は本書のリーダーシップを取っていた。第2は大連理工大学の日本人教師と日本の大学の教師陣である。編集当時、大連理工大学の日本人教師である香月真由美先生、武田美樹先生、頼永祐美子先生および日本宮城学院女子大学学芸学部国際文化学科教授宮脇弘幸教授は下記の章の執筆に多大な御協力をいただいた。第3はこの本の編集作業にあたって、原稿の内容だけでなく、日本語のチェックまでもお力をお借りし、多くの時間と精力を注いでいただいた大連理工大学の日本人の先生方々である。

各章の執筆者は下記のとおりである。

第1章は李筱平、第2章は香月真由美、第3章は武田美樹、第4章は宮脇弘幸、第5章は李筱平、武田美樹、第6章は頼永祐美子、第7章は范苓である。

最後に共同編集および御協力いただいた先生方々に深く感謝を申し上げたい。

# 目次

## 第1章 異文化コミュニケーションとは

1. 現代中国と異文化コミュニケーション	1
2. 異文化コミュニケーションに必要な基本的な考え方	3
3. カルチャー・ショック (culture shock) について	8
4. 異文化コミュニケーションの一般的な概念	13
5. 中国人と日本人の表現形式からみた言語コミュニケーションの相違	14
6. 異文化コミュニケーション能力	19
参考文献	24

## 第2章 人間関係とコミュニケーション

1. 日本人の人間関係観	27
2. 「タテ社会」の人間関係	30
3. 「ウチ」と「ソト」の人間関係	35
4. 「甘え」と日本人の精神構造	40
5. 「義理」と「人情」	44
コラム	50
参考文献	51

## 第3章 コミュニケーション・スタイル

1. 文化とコミュニケーション	53
2. コンテクスト	54
3. コミュニケーション・スタイル	56

4. 高コンテクスト文化と低コンテクスト文化に おけるコミュニケーション・スタイル .....	58
5. 双方向コミュニケーション .....	67
参考文献 .....	70

## 第4章 対人関係とコミュニケーション

1. 自己と他者 .....	75
2. 日本人の遠慮と察しのコミュニケーション .....	77
3. 対人関係における自己開示 .....	82
4. 日本的な小集団の特徴とコミュニケーション .....	87
5. 日本的対人関係（「恥」と「罪」、「タテ」と「ヨコ」、 「甘え」と「自立心」、「建て前」と「本音」） .....	93
参考文献 .....	100

## 第5章 言語コミュニケーション

1. 日本人の言語コミュニケーションの特徴 .....	102
2. 依頼表現 .....	104
3. 不満表明 .....	110
4. 勧誘表現 .....	114
5. 挨拶表現 .....	117
6. ほめ表現 .....	123
7. 感謝表現と謝罪表現 .....	134
参考文献 .....	143

## 第6章 非言語コミュニケーション

1. 日本人の非言語メッセージ .....	147
2. 身振り言語 .....	148
3. 表情と視線行動 .....	150
4. しぐさとジェスチャー（手勢、姿勢） .....	154
5. 身体接触行動 .....	164
6. 空間と対人距離 .....	165
7. 時間の感覚 .....	168
コラム .....	171
参考文献 .....	172



## 第7章 価値観

1. 文化と価値観 .....	173
2. 価値観とは何か .....	176
3. 価値観の特徴 .....	178
4. 価値志向の分類 .....	181
5. 日本人の価値観の変化 .....	185
参考文献 .....	189

# 第 1 章

## 異文化コミュニケーションとは

### 1. 現代中国と異文化コミュニケーション

中国社会は21世紀に入り、本格的なグローバル化を迎えた。国内総生産（GDP）は世界第2位を維持し、世界各地からもたらされた商品が街にあふれ、大量消費社会を迎えている。

科学技術の進歩、とりわけ通信技術の進歩によって携帯電話やパソコンなどが国民の大多数に浸透し、電子メールやインターネットを利用することで、誰でも国境を越えて世界と直接つながることができるようになった。情報をめぐって、マクルーハン（H. M. McLuhan, 1962）の言った「地球村（Global village）」<sup>1</sup>の住人になりつつある。中国各地の都市部は急速な発展を遂げ、周辺の農村部から出稼ぎに来た労働者が街の建設を大きく支えている。住宅改革が推進され、数多くの市民が新しく住宅を購入し、日々豊かさの何たるかを実感しつつある。「チャイニーズドリーム（中国夢）」の実現が夢でなくなったのが現代中国社会である。

夢の実現に伴い日常生活のペースもスピードを増した。その代償として、人々の受けるストレスもいっそう大きくなった。都市化が急速に進むなかで、人と人との関わり方が以前に比べてずっと希薄になった。人口の移動が激しくなり、昔なじみの隣人がいつの間にか見ず知らずの人に変わり、当たり前のように交わさ

1 マクルーハンは（H. M. McLuhan, 1962）において、テレビ・ラジオのような電子的なマスメディアが発達して、人々の情報交換がより緊密になり、時間と空間の壁が打ち碎かれると予想し、地球全体が村のようになると論じた。

れていた挨拶の習慣でさえ失われつつある。「遠い親戚より近くの他人」という諺に例えられた中国各地の地域社会の絆がほころびを見せ始めている。

地域社会から目を家族関係に移して見よう。最近のニュースを見ていると、親の財産を分割するために法廷まで訴え、本来の肉親関係の兄弟姉妹は反目してしまったり、親は子供をないがしろにし、その子を虐待するなど、これまでの常識では考えられないような人の道にもとる事件が次々と起きている。親子関係でさえそうなのであるから、他人との関係がいびつになっていくのはもっともとの事だと、納得せざるを得ない。

こうした風潮を一過性の社会問題であると片付けてはならない。より社会科学的な視点から冷静に事象を分析した時、人々の「コミュニケーション能力」が社会変動の速度に追いついていけなくなったことが少なからず大きな影響を与えていると見られている。

目を中国社会から世界全体に向けてみよう。果たして「コミュニケーション能力」はグローバルな範囲で、十分に機能しているであろうか。

21世紀は平和と発展の時代になると信じられてきた。しかし世界中で局地戦と小規模な武装衝突が頻発し、テロ事件は冷戦の時よりもその数が増加傾向にある。アフリカや中近東での武力衝突は終わる気配を見せず、平和への道にはほど遠い。和平交渉の重要さはわかっていながら、紛争相手に対する不信感があまりにも強いための対話への糸口さえつかめない現状がある。こうした不信感の根底にあるものこそ「コミュニケーション能力」の低下なのである。なんとかコミュニケーションをとり妥協点を見出す努力を最初から放棄して、核兵器を開発し、それが生み出す恐怖をもって相手を威圧し、軍事力で有無を言わず抑え込もうとしている。

人類の歴史において今日ほど世界の国々の相互依存度が高まっている時代はない。政治、経済、科学技術はもちろんのこと、環境、人口、エネルギーの諸問題など世界の片隅で起きた出来事が瞬く間に私たちの生活に影響を与えるのである。しかし、人間は、ここまで拡大したグローバル化を前にただただ手をこまねいて事態の収まるのを待つか、問題を解決しようとして何の予備知識もないまま異文化に手を突っ込み、却って火に油を注いでしまうしかないのである。事態は悪化の一途を辿り、多くの摩擦が生じ、諸民族が不必要に憎しみ、緊張を高める

ことになる。

このような時代に必要なのは、世界中の人々が小異を捨てて大同に就いて世界が直面している共通の課題の解決に向けて努力することである。特に外国語ができ、外国人と接触する機会のある人々が言葉を通して世界各地の人々とさまざまな文化的壁を乗り越えて、効果的なコミュニケーションを行うことが責務となっている。

こうした役目を担う人々の課題の1つが、自分とは異なる文化をもつ相手と、異文化コミュニケーションを取ることなのである。ここに異文化コミュニケーションが社会からいかに大きな期待を向けられているかわかるであろう。さまざまな誤解、摩擦といった経験を回顧し、検討することで、異文化を理解するために必要な知識と文化を学び、意識を高めて異文化コミュニケーションをより円満なものにすることこそそれに携わる者の責務である。

## 2. 異文化コミュニケーションに必要な基本的な考え方

異文化理解、異文化コミュニケーションと言っても、真の意味で異文化を理解することは、たやすいことではない。なぜなら、理解しようとする者自らの資質が問われるからである。

そもそも、「文化」というものを本当に理解しているのだろうか。文化を単なる「知識の体系」として見ていたら大間違いである。文化が包括する内容は幅広く、それを構成している要素は相互に複雑な関連を見せている。文化的生物である人間は、文字どおりに文化が育てた生き物であり、自らを育ててくれた文化とは内容を異にする「異文化」に対しては、素直にありのままの姿で受け入れることができない。なぜなら、人間は異文化を理解しようとする時、無意識のうちに自分の属する文化の価値尺度で評価してしまうからである。文化において、その言語、行動様式、空間・時間の座標軸に畏敬、親しみ感、甘え、侮蔑、禁忌などの意味が刷り込まれている。異文化コミュニケーションにおいて、そうした大系が的確に相手に伝えられなかった場合、さまざまな「誤解」を生じさせてしまう。

異文化の相手に対して持つ感情は、往々にして自分の属する文化を鏡として写した己の姿だと言える。ホール（1980）はこうした人と文化の関係について「文

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

化というものの影響は、人の神経系統の髓にまで染み付いてしまっている」と説明している。

文化とは人にとって「規範的」なものである。そのため、人は自分の属する文化における価値観をもってあらゆる判断を下す。このため自文化の価値観と衝突するような「相違」に対して、人は「好ましくない」というレッテルを貼りがちになる。そしてその度合が過ぎ、自文化の優位性を絶対的なものとする信念にまでなった時、人は自文化中心主義（エスノセントリズム）<sup>2</sup>に陥り、異文化の人々に対してステレオタイプなイメージや偏見を形成するのである。

ステレオタイプ（Stereotype）<sup>3</sup>は、異文化コミュニケーションの局面においては、特定の集団に属する人々の特徴を過度に「誇張された所信」<sup>4</sup>として認識されている。それは例えば、「ドイツ人は厳格だ」「アメリカ人は陽気だ」とかいったものである。こうしたステレオタイプは特定の集団をカテゴリー化し、その中に含まれる人間すべてを一般化したイメージで一括りにしてしまうもので、異文化コミュニケーションを阻害する大きな障害である。

偏見は、ステレオタイプと区別しにくい。ステレオタイプが「観念」であるのに対し、偏見は特定な人間集団に対して抱く「信念」である。しかも、「フランス人はロマンチックだ」とか「スペイン人は情熱的だ」といったように、ステレオタイプが相手を肯定的に評価する姿勢をそのまま持つものでもあるのに対して、偏見は常に相手に対して否定的評価としてマイナスイメージが付与される。その多くが、誤った既成概念に基づいた、批判的かつ差別的な態度として表現される。<sup>5</sup>

ステレオタイプや偏見は両者とも特定な集団に対して向けられる。ステレオタイプや偏見は、過度に単純化されたものであるため、特定な人間集団に対して極端な違和感を抱かせやすい。しかも違いの強調や決め付けの態度は、人々に先入観を持たせやすくするため、異文化間コミュニケーションに重大な否定的要因を作ってしまう。

2 サムナー、W. G 著、青柳清孝ほか訳：『現代社会学体系第3巻 フォークウェイズ』、青木書店、1975。

3 リップマン（1922）によって提唱された概念「われわれはたいていの場合、見てから定義しないで、定義してから見る」。Oakes Haslam & Turner(1994)などが詳細な定義付けを試みている。

4 オルポート（Allport, G. W.）: The nature of prejudice, Cambridge, Massachusetts: Addison-Wesley, 1954；オルポート著、G. W.、原谷達夫他訳：『偏見の心理』、培風館、1968。

5 同上。

文化背景を異にする人々と接触する際、文化にはそれぞれ特有の志向・行動様式があるということをわきまえつつも、その差異ばかりを強調すべきではない。ましてや文化に優劣をつけてはならない。つまり異文化との接触は「平等」で、「開放的な態度」が必要である。

異文化コミュニケーションは、文化背景を異にした人間同士のコミュニケーションであるが、究極的には、それぞれ個々のコミュニケーションである。つまり、コミュニケーションする際、「アメリカ人は～である」とか、「アフリカ人は～である」とか、「イラン人は～である」といったレッテルを貼って考えるのではなく、どのような文化に属する人たちとも、まず相手を「2人の人間」として、「個人」として接触していくべきなのである。そうすることによって、偏見や差別意識という自己束縛から、自分自身を解き放すことができるようになるからである。

中国人社会のなかで生活する外国人の数が増加し、海外で生活する中国人の数も増えている今、中国人は、全世界でさまざまな外国人とコミュニケーションを行わなければならない。そのためには、異文化間におけるコミュニケーション・ギャップの原因を理解し、文化的相違から起こる問題に適宜対処し、自らも異文化接触に特有のカルチャー・ショックへの心構えを身につけなければならない。

こうした社会の趨勢を受けて、中国における外国語教育の現場においても異文化コミュニケーションの概念が導入されて久しい。社会言語学の成果を踏まえ「状況と場面」をシミュレーションして、いかにコミュニケーションを成立させるかを演習する新しいカリキュラムが中国各地の高等教育で模索されている。単なる外国語を覚えるという姿勢から脱皮して、当該言語の属する文化圏ではある特定の場合にある特定の表現をするのはなぜかを模擬体験し学習させようという試みである。

例えば、中国人日本語学習者にとって、日本人の日常生活で普遍的に使われる「婉曲表現」は学習しても定着しにくい概念である。会話学習において定型文を覚えたとしても、それをなぜ使うかという日本人の心情の動きまでは理解できないためである。そのため、日本語を相当理解した学習者でも、日本人が他人を訪問するに際して、決して安価ではない贈答品を「粗末なものです」とか「つま

らないものですが」といった言葉を添えて相手に渡す心情が理解できない。会話の教科書で頻出する文型ではあるが、いざ実際にそうした場面に遭遇した時、中国人は「粗末なもの」「つまらないもの」という言葉を耳にした時、「粗末なものをなぜわざわざおみやげにして持ってくるのだろうか？」と、瞬時に不信感が胸に広がるのを禁じ得ないのである。こうした日本文化特有の「相手を立てるために自らと自らに属するものを下げる」という謙譲表現が日本の文化の中でどのようなメカニズムを有するかを本当に理解できるまでには、実地体験を積んでいくしかないのである。

もう1つ別の例を上げてみよう。日本人の謙譲表現である「よろしくお願ひします」とか「いつもお世話になっております」といった挨拶の定型文は、同様な「謙譲の美德」の価値体系が中国文化にもあるため、中国人には十分に理解できる。しかし、よりグローバルな視点を広げていくと、これを受け入れられず、憤激する人々も世界にはいるのである。「相手に媚びる姿勢が偽善的だ」とか、「相手に世話になっていると心から感じていないのに口だけそう言うのは浅はかな小手先の知恵だ」として、日本人の「謙譲」を絶対に受け入れない文化が存在するのである。グローバルな範囲で異文化間交流を目指していくためには、こうした文化の異質性があることを大前提として真っ先に学ぶ必要がある。<sup>6</sup>

既存の中国における外国語教育では、対象言語を習得することに力点が置かれカリキュラムが編成されてきた。しかし、近年、自国語の言語文化に対してより覚醒された新しい観点で認識し直さなければならないという批判が提出されている。つまり、外国語と自国語を異文化理解の両輪として、両輪が平均して地についていくからこそ、異文化コミュニケーションが偏りなく妥当に行われるようになるという考え方である。そうでなければ、「外国語を使うスキル」に長けるだけの人材による言葉のもてあそびに終始し、相手を理解し、自分を相手に理解させるという異文化コミュニケーションの最終目的が達成されないだろうし、真の意味で外国語を習得したことにはならない。

さて、ここで異文化コミュニケーションに携わるにあたって堅持しなければならない姿勢について確認しておきたい。2つの意識からなる。

6 鍋倉健悦：『異文化間コミュニケーション入門』，丸善ライブラリー，1997/1999。

1つ目は文化相対主義 (Cultural relativism) である。<sup>7</sup>これは全ての文化は優劣で比べるものではなく対等であるという意識である。18世紀後半に産業革命をなしとげ、19世紀から20世紀にかけてグローバルな拡張をとげた欧米諸国から衝撃を受けて、中国も日本もそれまでの旧制度が崩壊した。そうした西洋の衝撃 (Western Impact) のリアクションとして、中国人も日本人も欧米諸国へ憧れと劣等感の混在する複雑な上目使いの感情を持つようになっている。そして、その一方で中国人も日本人も共通して、近隣アジア諸国の異文化に対しては高所にたった見下した優越感を持つ傾向が見られた。文化相対主義とはさまざまな異文化に序列をつけるべきではない、対等であるべきだという意識である。つまり、相手への尊厳をもって異文化を見なおさなければならないということである。これには意識革命が必要となるが、目の前に迫っているアジア・太平洋の時代には不可欠なものなのである。

2つ目は、双方向型の異文化コミュニケーションを推進しようという意識である。多くの中国人は、アメリカやヨーロッパといったいわゆる先進文化を、一方的に摂取・理解することには熱心であるが、自分の文化を異文化の人たちに理解してもらおうための努力が足りない。結果的に自文化普及活動の経験に欠けている。今後は、このような単一方向型の異文化コミュニケーションから、相互理解を目指した双方向型に大きく転換する必要がある。

双方向型異文化コミュニケーションについて言えば、中国はそれまでの外国語と外国の文化技術を導入する姿勢から、21世紀に入り政府主導で積極的に中国語と伝統的な中華文化を世界各地で普及させる文化活動を開始している。

その1つとして「孔子学院」がある。<sup>8</sup>2004年に韓国のソウルに設立されたのを皮切りとして、現在世界106の国で350あまりの「孔子学院」が設立されている。今後は、より多くの外国人に中国語と中華文化を啓蒙教育していくため、中国人自身がより一層、中華文化についての研究・教育・普及を心がけるようにしなければならない。

7 小泉潤二：「言われつけてきたこと——反=反相対主義と還元論」；ギアツ、小泉潤二編訳：『解釈人類学と反=反相対主義』、東京：みすず書房、2002。

8 孔子学院は中国政府教育部に直結する国家漢語国際普及指導チーム事務局が主務機関であり、実務は孔子学院総本部が統括する。



中国社会は、諸民族の文化が多元的に統一された中華文化<sup>9</sup>をもち、生活環境の至るところで異文化コミュニケーションが必要な社会ともいえる。経済面での成功も異なる文化背景を持つ人とのコミュニケーションの中でより豊かな収穫を得られるものである。経済的な協力の拡大により、異文化、未知の外国の人々が繋がっていくのが現代社会である。同一文化の人々が集住して、職を独占し、異文化を排除していくという考え方は既に時代遅れである。そのため、同じ集合住宅やコミュニティに住んでいる隣人の価値観、生活習慣が自分と同じはずだという考えは捨てて行かなければならない。

21世紀の人間であることは、異文化と折り合いをつけていくことが運命づけられている。異なる文化に対する理解を深め、異文化コミュニケーション能力を高めることが必須の課題なのである。

### 3. カルチャー・ショック (culture shock) について

異文化コミュニケーションを考える上で、避けて通れない問題にカルチャー・ショックがある。自分が生まれ育った環境の文化とは異なった文化に遭遇すると、人はある種の衝撃を受ける。それは、これまで社会生活に適応するために慣れ親しんできた手段が、異文化においては役立たなくなり、心理状態に混乱が生じるからである。

#### 3.1 カルチャー・ショックとは

カルチャー・ショックという言葉は、オバーク (Oberg, K.)<sup>10</sup> が1960年代に頻繁に用いるようになって一般に認識されるようになった。オバークは、カルチャー・ショックを、「新しい文化環境に対する個人の心理反応」と考えていたが、その後、その定義をめぐる、研究者たちの間で微妙なニュアンスの違いが出てくるようになった。ホールは「自分が経験してきたたくさんのなじみある手がかりが失われたり歪められたりした上、他のなじみのない手がかりに取って代

9 費孝通：「中華民族的多元一体格局」、『北京大学学报』（哲学社会科学版），4：3-43，1989。

10 Oberg, K.: Cultural shock: adjustment to new cultural environments, *Practical Anthropology*, 7, 177-182, 1960.